

日本語と日本人の思考

氏 家 洋 子

0. 問題のありか
1. 「思考」の「言語」との関係のあり方
- 1.1 「思考」の反映としての「言語」
- 1.2 「思考」と「言語」は全く別物という見方
- 1.3 「思考」の「表現」として「利用」
- 2.1 日本語のヒダをさぐる——心情表現の優越——
- 2.2 日本人性の成立
3. 言語と思考の相関関係

0. 問題のありか

「日本語と日本人の思考」という標題は、日本語と日本人の思考との間に或る関係があるということを前提にして、その内実を見ていこうとするもののように誤解される恐れがある。

たとえば

A. 我々日本人は日本語でものを考えている
という類の言い方がある。

X ないしは X 民族の言語とその X 国人ないしは X 民族の思考との間に緊密な関係があるとする見方について、一体そういうことができるのか否か、できるとしたらそれはどうとらえるべきなのか、また、その内実はどんなものなのかを明らかにするのが本稿の狙いである。

命題 A は地球上に多くの国ないし民族、及びその言語の存在する状況の中で我々の属する所からの発想という意味で個別的な言い方をしたもの

であるが、これを同様に X 国語と X 国人の思考、Y 国語と Y 国人の思考と普遍化して言うこともまたできる。

しかし、このような言い方をしておけばまだ問題は小さいが、ここから、「従って、

B. 日本人の思考は日本語でしか表わせないのだ」としたらどうなるか。

問題は新たな局面を見せてくるが、こうした、命題 A から命題 B への飛躍が飛躍として意識されず、ほぼ同様のことのように考えられ論じられている実状がありはしないか。

A から B へ飛ぶのは、間に、X・Y と見て来た結果として

C. 国・民族により言語が違う
という命題を通り

D. 国により考え方・思考が違う

というところへ行っただけのものと思われる。この短絡は C という事実に対し、D なる一般常識が強く意識にあった結果なされたものと言うべきだろう。

としても、一方で問題になるのが、B を導いてしまった A には「日本語で」として言語と思考を結びつけたこの語の解され方という問題も孕まれていると見る必要があるだろう。

この辺に目をすえながら考察を進めていくことにしよう。

1. 「思考」の「言語」との関係のあり方

まず、一般的に言われているとした命題 D を問題にすると、この言い方は実に大ざっぱであり、この「思考」とか「考え方」なる語には実際には多くの意味がこめられていると考えるべきである。

「国」という言い方も厳密には自然力で作られた民族と、武力で作られた国家との違いがはじめにあるということが全地球的視点からは言われねばならないはずだし、長い歴史の中で血統・生活・言語・宗教・風習等が共有されてきた社会を広い意味で「国」とよぶなら、一口に言って同一文

化圏と言いかえることができるだろう。

そして、「思考」とか「考え方」というものは今日分析哲学等でいろいろ考えられ始めてはいるが、それと文化との関係が明確にされているという事実はまだない。

にも拘らず、「国によって考え方が違う」と言われるのは、では、なぜなのか。

それは、考え方というよりは考えていること、つまり、その内容であり、また、価値観であり、それは習慣とか心情とか広義の文化に起因するものが違う、ということであろう。そうであるとするなら、これらのことと思考との関連及び区別が考えられねばならない。

そして、そうした内容がことばによって語られるという形で表現されることが多いために、「国によって考え方が違う」という言い方が「言語によって思考が異なる」という言い方をも引き出してきたのではないだろうか。

ここで、まず、思考を基軸に据え、これの言語との関係について考えていくことにしよう。それには、まず、この両術語の概念規定をしてから始めるのが順序のようだが、そのこと自体が本稿の最終目的と重なり合っていると云わねばならない。

言語については、ごく一般的な、ラングという静態的概念から進めていき、矛盾が露呈したら、その原因を考え、新たに概念を作り出していくことにしよう。

思考については本章で一般概念を少し批判して方向付けだけはしてあるので後述部で次第に明らかにしていくことにする。

1.1 「思考」の反映としての「言語」

思考の言語との関係でまず第一に考えられるのは思考がそのまま言語の形で外界に反映(広義の、一般的な)されているという見方である。ここには、逆の関係として考えられる、言語によって思考の形を見ることもでき

るという見方も含めて考える。

ここに属するものとしては、たとえば、

日本人の考えはあいまいである。これは、日本語の構造、即ち、叙述が末尾に来る形から、考え方が拘束されているのである。途中まで述べた段階で相手の顔色を窺って最後の叙述の部分を変えてしまうことが可能である日本語の構造に由来する。¹⁾

という言い方で、日本人の考え方と結びつけるような見方を挙げるができる。この言い方は日本語を特にそのシンタックスの面から日本人の思考のあいまい性という見方と結びつける行き方である。

これは、思考が言語により制約されているという、焦点をしぼった論述を可能にするかに見えるものであるが、この事実からは、思考と言語を直接結びつける見方のほかに、これに対立する見方、即ち、思考を言語以外のものにより制約・影響されるとするものが成立つであろう。その時、今述べたシンタックスの問題は日本語の偶有するその機能を「利用」して「表現」するという方向から考えられることになる。これについては 1.3 で詳しく見ていく。

1.2 「思考」と「言語」は全く別物という見方

次に考えられるのは、1.1 の思考と言語の直接的関係という見方と全く逆に、思考は思考であり、言語は言語であり、全く別物だという見方である。

アメリカ・インディアンのナバホ族では英語の‘black’が5色に細分化されているが、英語の‘blue’と‘green’は1語で表わされており、この点は日本語と同様である。しかし、

だからと言って、ナバホ族や日本人が、青と緑を区別できないわけではない。視覚的にはもちろん区別できるが、色の言語的な捉え方として両者を区別しないのである。通常の生活には、区別する必要がなかったのだろう²⁾。(下線：氏家)

というような事は、外界の事実に対する「意識」があるにも拘らず、言語としてそれが無い。言語には「言語的な捉え方」という、自律した別の世界

があるということである。

今、「意識」という語を使ったが、ここにおける「視覚」のような「感覚」、続いて「意識」というようなものは、後述する「心情」などと共に、後に規定する「思考」の下限をなすものとして位置づけるべきだと考える。

さて、このように外界に事実があり、それが意識されていながらも、言語に定着していないということは

日本ではなお男女別々の道徳が行なわれているのに、日本語には英語の double standard (男女別の道徳) という言葉はない。³⁾

のような論述にも見られるし、長幼の序の本家である中国において日本語におけるような待遇語法の発達が見られないというような例など存外多いのではなかろうか。

1.3 「思考」の「表現」として「利用」

1.1 の末尾で、1.1 と逆の方向から考えられるものとして触れた見方である。言語に基点を置いてみると、「表現」という、言語のあり方として浮かび上がってくるものであるが、思考の側からみれば思考を直截に表わすのではなく、外界に存在するラング(この場合は、そのうちの言い方をさす)を、その場にあった形のものを利用するという形のあり方である。

これは慣用化された挨拶に近い言い方の場合などに特にその原初的な形で多く見られるが、思考が言語に直接結びついたものではなく、その間にワンクッションがあり、その上でその言語が選取られ、利用されたという意味で、「言い方」であり、「表現」であるわけである。

考え方の違いというものが国によるよりも同じ言語を話す人間の中で、何か他の要因によりなされる例ともなるのでここに一例を引く。板垣元氏「日本人の論理構造」⁴⁾ 第一章の文章の展開の仕方であるが、ここでは

芥川の言葉じゃないが、人生は一行のボードレールにもしかないという言い方について分析し、他の同様の言い方としていくつかのものを挙げている。

まず、その分析であるが、氏はこの言い方は論理的に矛盾しているように見えるが、慣用以前及び現在も表現の底には合理的な思考が存在するはずだとして、通時面をさぐり、南方熊楠の文章から「吾が身じゃないが」という前置の必要の習慣、及び「おれが事ではないが愛をきられて」という『傾城色三味線』の例を挙げる。

これは形式的には「N+じゃないが」ということで一部通じる。そして、類似表現として、

こんなことあんまり言いたくないけど	} (1)
言っちゃあ悪いけど	
自慢じゃないが	
おいしくないけど	

などをあげる。その理由は「悪い」とか「ない」とか否定的な語が用いられるということが「～じゃないが」と同じく、以前はまじない言葉であったことを示すからということである。

更に、こうした伝統的な言語習慣に密接して、形式的・心理的に、近い関係の表現として、

まことに失礼ですが	} (2)
間違っているかもしれませんが	
お言葉を返すようですが	
こんなこと言えた柄じゃないんですが	

などをあげる。そして、類似表現 (1) のいくつかの例が話し手の罪悪感軽減のための免罪符、恥を前もって防止する煙幕的役割であるのと同様に、今あげた類似表現 (2) の例も責任回避・相手が怒るかもしれないことに対し予防線を張る気持としてまとめられている。

ところが、私に言わせれば、まず問題のもとになっている「芥川の言葉じゃないが」については「芥川じゃないが」と使うことが多い。(72年6月の日本語教育セミナーにおいて受講者の方の意見を聞いたところ、10人のうち、1人だけが、「言葉じゃないが」と言う場合もあると言い、9人は私と同意見であった。)

そして、その気持は

芥川が言ったから言う、のではないが
芥川のことばがあるから言う、のではないが

ということであり、これが

先生もおっしゃっているように、そんなにあなたの病気は重くない
のような形が成立するにも拘らず、

芥川が言ったように
とは言わないゆえんであろう。

芥川が言ったように
という肯定表現は強すぎるという、使い手の感受性とも関連して、このよ
うな言い回しができたものと思われる。

一方の「我が身じゃないが」は「N+じゃないが」の形ではあるが、「N」
と「じゃないが」の関係は今述べたものの場合と違っており、「じゃない
が」のみが、「芥川のことば」、「我が身」に続くものとして一致している
が、形式、というより現象的類似にすぎない。

板坂氏は「じゃないが」のみに注目し、他人のことばをそれだけそのまま
繰返すのはタブーとされていたという言語習慣で「芥川の」、及び、類
似表現 (1)・(2) をひっくくったわけである。

私の見方から言えば、

さっきの話じゃないけど
などに通じる、タブーとは無関係な言いまわしということになる。氏は、
現代人の気持としては

芥川のことばをそのまま引用するのは気がひけるけれども
とか

ぴったり適合する表現ではないが、芥川のことばをかりて言えば
であるというように内省していながら、気持より形に、しかも、その一部
にのみ注意を向け、内省との関係を追求しなかった。

また、類似表現 (1)・(2) を氏が結びつけたのは、この話の引用のもとと

なった、「ある言い方を利用する」という思考と言語の関係によって結びつけたと私は解釈するのであるが、これら類似表現について私自身内省してみると、本当に

こんなことあんまり言いたくないけど
と思う時、こう言う。また、

間違っているかもしれませんが
のような言いまわしをする場合も同様である。氏はこうした言い方について

自己の行なわんとすることや自分の持っている情報・意見について、その性質限界などを明らかにするという点では、緻密な物の考え方を反映しているように見えるし、事実そういう場合もないではないが、
...

と述べている。氏の結論は先に述べた責任回避・予防線ということになるのだが、この引用に見るように、性質限界を明らかにするということを認識しながらも、これについては

そういう場合もないではない
とし、結論に導いたほうについては

予防線を張る気持が働いている場合が大部分であろう
と、根拠を挙げずに量的表現をし、それにより自分の感覚の正当性を主張しているように見える。

と言うのは、私自身の内省は、氏が「ないでもない」とした方そのものなのであり、同じく言語には思考・感情そのままを表現したものとして、いみじくも

すみません 恐れ入ります
のような言いまわしが存在していることを同時に思いうかべてよいのではないかと思うのである。即ち、

すみません

と

ごめんなさい

の違いである。前者は自分のすること、または、したこと、あるいは、してもらったことが相手に対して何か申し訳ないことのように思われ、自分の心が済まないという気持を表明するものであり、許して下さいの意の後者とは、表現主体からそのことばが出る時の意識に於てたいへん違っていると思う。

後者の方が相手に対するよびかけ度が高いが、前者は一方的な意思表示である。だから、相手との関係が疎であり、緊張度が高ければ前者が選ばれ、親であったり、その関係があまり意識されない程度の緊張度である場合は後者が選ばれるだろう。とっさの時口について出るのは少なくともそうなるだろう。

そして、単なる意思表示という形の言語表現が存在することを思えば、

間違っているかもしれませんが

がどうして同様に使われたいはずがあろう。(論の運び方としては、ゴメンナサイとスミマセンとが「利用」と単なる意思表示との違いにあたるのではなく、少しズレた感じもあるが、意思表示のみの表現もあるということを出したかった為にこのような進め方になった。)

根本的な使われ方としては、この言い方をスミマセンと同じタイプのものでしてまとめて考えるのでよいと思う。ただ、二次的にそれが利用という使われ方がされるということはあるのであって、それは言語のみならず、人間生活にある、諸々の、形をもつもの全てに言えることであろう。

私自身は一次的な使い方をする人間であり、それは人生経験の質などにもより、それがひいては人間の考え方にどの程度かの違いをもたらすのであろうが、それはともかく、そういう人間であっても、「利用」ということは「さわり」としてわかるという感じがする。今、相手は私がこう言うことを期待しているのであろうし、それを言わないとたいへんなことになる、あるいは、まずいことになるという切実感がある時のみ、やむを得ず使うのであり、アクティブな「利用」ではないが。

こういう形のわかり方しかできないのは、「利用」を大部分とし、論を

展開し結論づけていった板坂氏とは恐らく人生経験の質とか量が違うし、それに関係して、世代も違っている。つまり、生きた時代背景、考え方を規制するもの、が違う。

だから、現実的に「利用」があってもそれを私は必要を感じないからほとんど意識していないのかもしれないし、氏はそれこそがこの言い方の本質であるとして論を進めなければならなかった、と考えることができる。

氏のまとめ方、論の展開のしかたと私のそれとが違った主な原因の一つとして、氏が思考と言語の関係において「利用して表現する」というあり方に注目していたからであろうという例である。

2.1 日本語のヒダをさぐる——心情表現の優越——

思考を基軸に言語との関係を三通り見て来たのであるが、その1と3とは直接にせよ、間接にせよ、言語と関係、しかも緊密な関係をもつというものであった。

ここでは、逆に日本語をいくつかの点から取り上げながら、そこから何が引き出せるかを通じて、思考との関係に近づいていくことにしよう。

どんな形ではいっていかるといえば、日本語が外界の事物と対応しているようなものからではなく、言ってみれば日本語のひだのようなもの、それらをさぐることからしていくことが有効なのではないかと考える。

つまり、「ひだ」とは平面的な意味を表わすのではなく、時間的空間的な思惟の過程を含んでいるの意となる。

たとえば、私達がほとんど意識せずに使っている日本語について、外国人学生に教えるためにある語の使い方についていくつかの場合に分けて考えていくと、時として、意識の表面には全くなかったようなものが結論として帰納されてくるのに驚くことがある。

先述のスミマセンとゴメンナサイも一例だが、ふだん使い方について全く意識はしていないものの、とっさの場合にその場に応じた一つの語が口をついて出てくるということは、意識していないだけであって、内省して

いけばその違いに到達できることを意味する。

外界に、言語に対応する事物が存在している場合などはともかく、意識していない言い方・言葉について使い方を説明する段になると、その無意識の世界が暗く広く横たわっているように思われる。いくら辞書を引いても普通の国語辞典は言いかえの語が循環的に出てくるのがオチだから、その違いを説明する作業も強いられる結果になる。

いわば日本語のヒダのようなもの、その複雑さに気付いてア然とする。

先日の体験にこんなことがある。タレントが司会者のインタビューに答える形のテレビ番組を見終ったあとで、一人の人が

このタレントの話には内容がない。「やっぱり」「やっぱり」ばかり言っていて...

と言った。実際はそのもとになった話を出すべきだが、実は私はこのテレビをいい加減に見ていて、この発言を聞いて急に考え出したので、それ以後考えたことについて述べるしかない。が、一例を挙げれば、テレビドラマの出演と映画の場合とどちらが面白いですかという類の問が出されていた。

ヤハリとかヤッパリなる語ははじめに或る考え方・考えた内容があり、今、或る事態に及んで考えてみた結果、その、はじめにある考え・内容と一致したということであり、この語の使用自体は「話に内容がない」と結論づけさせる直接の原因になるには少し弱いのではないかとと思われる。

しかし、その人にそう思わせたのは、はじめから自分の頭の中にあることから進展せず、やはり同じだという頭の働きがそのタレントから感じられたということであり、しかもそれが何回も続いたためにそのタレント自身がその場で、或る事態の中で考えたという独自性、その人のその時の意見としての必然性がないということが「内容のなさ」という感じを導いたものと思われる。

もちろん、こうした場合でも、はじめにその人の頭の中にある考え方自体がどんなものであるかも夫々の場合により異なるし、また、そのことと

切離せない関係にあるものであろうが、どう考えてもそのはじめの考えと一致するということはある。

しかし、ともかく、その、はじめに頭にあった考え方自体の内容性と係わってのことだが、思考の飛翔面のネガティブなあり方を表現している語と考えられる。また、3章と関連することであるが、感情の開放がなければ思考の飛翔もおこりえないという一面もある。

今だったら車で行くより歩いて行った方がかえって早いですよ。のような「かえって」は辞書に「逆に」とあるが、ただ「逆に」「反対に」のではなく、普通一般の考え方とか価値観とかが一方にあり、それに反する場合の「逆に」「反対に」の意であろう。

あんな、わけのわからない人、放っておきなさい。

「ておく」は、上のような意味で使われ始めたのが、今多く使われるのは、あの将来の一時点を頭において、そのための準備を前以てするの意である。

あの人に電話をかけておきました。

日本語にこうした、時間について、過程を含みこんだ意識が見出されるということである。

このようにして日本語のひだをさぐっていくと、日本語の場合、思考・論理の中に心情が一緒にこめられて未分化の状態になっているものが多いことに気付く。

即ち、

財布をなくしてしまった

のような「てしまう」には、財布をなくした・残念だ、という、事実と心情の両方の情報が一つにこめられている。

なまじ手を出さない方がいいですよ

「なまじ」については、板坂氏が「小さなプラスが大きなマイナスを導くという論理」とまとめているが、それだけでなく、

しないほうがいいのに、するとよくない

という、ある行為をする前に、それを見る人間の、多分に感情と未分化な価値観・判断が入って、やめた方がよいとしている考え方だと思う。

また、

どうにも恥ずかしくて...
どうにも困った

などは、

とても恥ずかしくて
とても困った

などとは違う、心理の曲折が窺える。後者の副詞のように単に程度を表わしたのではない前者のようなものになると和英辞典の類を捜しても項目すら見当たらないことになる。

軽く、大まかな推量を表わすのに使われる副詞「多分」に対し、「恐らく」の方は深く考えた結果とか慎重な推量を表わすのに使われる。

せめて電話だけでもかけてくれればよかったのに
の「せめて」は「不十分ではあるが、それなりにできる最高のこととして」の意であろうが、この場合、心理的「不十分」意識からこの表現が成立したといえるであろう。

こうしたことに関係して、71年に土居健郎氏の出した「甘えの構造」⁵⁾には、Cultural shock から自分の日本人としての心理に気付き、その後精神分析医としての氏の立場から、甘え概念が患者の心理の理解に極めて有用であると確信するようになった、とある。日本人のその特徴は「甘え」自体が日本語独特の語であり、スネル・ヒガム・ヒネクレル・ウラムなど、甘えたくても甘えられない心理などを表現した語が発達していることにも明らかであるという。

よく、フランス語は論理的で日本語は非論理的だなどという言い方もされるが、勿論、論理とは何かを厳密に規定してからでない結論的には言えないことだが、この言い方はそれなりにはわかるのであって、日本語に

いわゆる論理だけでなく同時に心情がこめられていることがその一つの大きなゆえんであろうし、これは日本語——日本人の言語を特色づけるものとして興味深い。

と言うのは、それが日本人の民族性に根ざすと思われるからである。

2.2 日本人性の成立

日本人の住んでいる日本列島の地理的条件に目を転じてみよう。

従来これについてはモンスーン気候に属するということと農耕社会であるということから日本人の国民性を論じることが多くなされてきた。

しかし、それだけでなく、特に日本列島というところに焦点をあててみると、イギリスなどと違って、朝鮮半島との距離が、歴史の作られてきた、航海技術の未発達な時代に於て、相当あるということ。そして、海流の関係から吹きだまり的地点にあるということが注目されねばならないだろう。

こうした地理的条件は日本を外敵の侵入を受けたことのない国にした。外国から来る人間は侵略を目的として計画的に大量に軍事力をもってくるのではなく、そうすることは不可能であって、不可抗力で漂流して来た者のみであった。そして、同じ理由で、また、その人間達は帰って行くこともできなかった。

他の土地から来た者が武力で決裁して支配階級と被支配階級とを作り出していくということを考えると、武力叛乱が起りうるから支配の永続化は不可能であり、反転するくらいなら、支配をせず略奪して帰った方がよいということになる。そして、危い時には逃げることを考えると、いつも逃げられるルートを確保しておくことが征服王朝作りの条件となる。

日本列島の地理的条件から、征服軍が来、また、王朝を作るということは不可能であったから、階級支配という政治文化のモデルで日本社会について考えることはできない。

それでは、ということになれば、日本社会は高い文化を持った人々が奉

られ、押し上げられてできたという構造になるだろう。

前者のような構造を基礎にする政治文化でなされたのがハードな支配とみれば、後者の場合はソフトな支配ということになる。

そして、こうした形で異質なものが馴化されるという歴史を辿ってきたことが日本社会の特性としてあげられるだろうというわけである。神島一郎氏がこのように説く⁶⁾ところは、こうなる原因があつての、この経過＝歴史ではあるが、この歴史を通してきたということは重く考えられねばならない。必然性の強力な固定化という意味においてである。

中根千枝氏は「タテ社会の人間関係」⁷⁾で、それを決定する重要な基盤として日本人の単一性を強調するが、神島氏によれば、純粹の単一社会ではなく、馴成単一社会だということが日本社会の特性である。

この日本社会では、日本人の外貌の諸種類が、外国における、人種・言語・習俗の諸種類をそのまま示すことにはならないということがあつるが、文化の面でも諸種の文化要素がすぐにも変貌をとげて由来は忘却されるというように、馴化の規制が大変強い。

そして、さらに、ハードな政治文化をもったヨーロッパ等の社会は外界との間の物質代謝に重きがおかれ、従つて、個体の独自性が究極的基礎となっているが、これに比べ、日本のようなソフトな政治文化の社会は、人間が人間であること、即ち、人間を相手としていることによって成立している社会(つまり、精神代謝に重きをおいた)である、ということがある。

このように神島氏が説く物質代謝・精神代謝のいずれに重点がおかれているかの違いは、日本そのものの特質を浮かび上がらせるよりは、洋の東西の特質としてまとめられるものを物語っていることにもなりそうであるが、ともかく以上で日本人性の成立とその内容は、一定程度つかめたといえよう。

このような日本社会、そして日本人性においては、ちょうど家庭外より家庭内で個人的心情が吐露されるように、心情を表現した語が日本語に多く見られるということになり、また、論理と心情が渾然とした言語(ラン

グ)が生み出されたということになるであろう。

しかし、このことは外界の事実と言語とが一致しているということを前提にした場合の言い方である。言語(ラング)が常に外界と一致しているわけではなく、また、外界の事実も常に言語に反映・表現されているとは限らない。1.2 で見た通りである。

そして、このことから、だから、日本語に思考・論理が反映・表現されていないということも考えられるのである。

3. 言語と思考の相関関係

こうした外界の事実と、それに基づく日本語における心情表現の優越は思考との関係においてどうとらえられるべきか。

心情は、言語の内容という意味で思考なる語を使えば広義の思考に属するものとも言えるが、今、ここでの「思考」の使い方を決めることから始めることにしよう。

思考とは考えたこと・結果ではなく、ある、なんらかのものになるものに基づき、それをいかに考えていくか、の過程である。こうした動的なとらえ方を表わすのに、J. Dewey の ‘reflective thought’²⁸⁾ という語は適当であろう。

固定的・静態的なものではなく、時間を含む過程的あり方をしているものととらえられる。

だから、出発は心情でも主観でもある概念でもイメージでも何でもよい。そこから出発して、どう reflect し、考えていくか、そのことが思考の実体・本質であると考ええる。

そのような形で心情というものは思考に係わっている。別物だとして切ることにはできない。過程において躍動的な形をとらない思考においては、そこにおける、出発点としての心情の占める比重はいきおい大きいものとなるだろう。

民族性が思考との間に一定の関係をもつゆえんである。

しかし、そのように思考というものをみてくると、日本語に多く見られる心情表現というものが、言語的に単語レベルからの解釈であったことに気付く。もし、思考を、時間を含む過程的なものとしてとらえるなら、その各一次的結果を知ることができるのは言語においては文・文章のレベルにおいてである。

文のレベルで

私はみなさんに日本語を教えるわけです。
あのころはよく新宿へ行ったものだ。

など、心情表現も重なり、かつ思考過程をも表わしているというものもある。

単語レベルにおいても、先にヒダという言い方をしたように、特に副詞に、多く、他の単語・文と違っていろいろな心的過程が含まれているというものもある。が、一般的にはむしろ、文の有機的集積としての文章の中に思考の過程を見出すことができると言うべきだろう。ただ、それも、今述べたような単語・文から発展したものだから、文章もその連続の中でとらえねばならない。思考の飛翔・躍動力が文章の発展するレベルで強いものであれば、それだけ思考は深くあらわれうるだろう。

その結果としては、1.2 で見てきたような、単語レベルで思考内容が表現されていないものも、文章のレベルまでくればおのずから現われるといえる。

ここで、M. Merleau-Ponty が

思惟は稲妻のように走る。しかし、それを自分のものとするのは言語によってである⁹⁾。

と説いた、思考における言語の働きを考え合わせねばならない。

言語は思考を表現するためのものだけでなく、はっきりした形をとらない思考を定着化させ、その一応の表現をもとにして、また思考が進むという形で両者が係わり合っていることが注意されねばならない。そして、この意味での0のAとBの差異が考えられる必要があるだろう。

こうした関係としての言語と思考を考えると、それぞれ、出発点ではだいぶ離れて別物でありながらも、両者の高次のレベルでは別物とは見がたいくらい密接に係わり合ってきていると見るべきである。

思考を過程的にとらえるなら、言語は文章レベルで考えられていく必要がある。ここにおいてはじめて言語と思考の関係が問題にされるべきであり、しかも、ここは、国により言語が異なるから思考も異なるというような段階をのりこえた地点であって、ここではむしろ、思考というホモ=サピエンスの特有するものというユニバーサルなものが前面に据えて考えられることが妥当であろう。

72.7.18

あとがき

結論部に直接係わることではないが、言語のレベルを語・文・文章と分け、しかも、そこに既成の概念をあてはめていたため、その点で若干混乱した感がある。この辺についての疑問から発して模索し始めたころ、『『考える』とそこにおける言語』（早大語研10周年記念論文集、73.3）を書いた。これは全面的に本稿に続く論攻なので、御参照願えれば幸いである。

注

- 1) 1972年6月大学共同セミナー「日本人の再発見」で同志社大学オーテス・ケリー氏が「岡目八目」と題す講演中で述べたものを要約。なお、「日本人の再発見」(72.11, 弘文堂)に収録がある。
- 2) 吉田禎吾氏『外国語を学ぶことによって得られるもの』「英語教育」72.5
- 3) ジョイス・C・リブラ 72.5.9 毎日新聞
- 4) 71.8 講談社現代新書
- 5) 弘文堂 1971.2
- 6) 注1のセミナーにおいて、神島一郎氏より「日本社会の特性」のセクションで指導を受けた(注1参照)。「文明の考現学」(71.12, 東京大学出版会)にもその一部は詳しい。
- 7) 講談社 1967.2
- 8) 'How We Think' D.C. Heath & Co., 1910 p. 2
- 9) 'Phénoménologie de la perception' Paris, Gallimard, 1945, p. 207